

平成 26 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2014年4月～2015年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満たないもの、報告書が2年連続して未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧告させていただくことがありますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名 愛知教育大学附属岡崎中学校

種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 高等学校 中高一貫教育
 教員養成 技術/職業教育
 特別支援学校 その他 ()

住所 〒444-0864
愛知県岡崎市明大寺町栗林 1

E-mail : ms-ando@aeucc.aichi-edu.ac.jp (本年度のみ)

Website : <http://blog2.oj.aichi-edu.ac.jp>

児童生徒数：男子 236 名 女子 238 名 合計 474 名
 児童・生徒の年齢 12 歳～ 15 歳

2. 担当者 ※公表しません

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか ()

4. 活動内容

○持続可能な社会を目ざす子どもを育てる日々の授業

1 私たちの願い

「持続可能な開発のための教育」のためには、

- ① 問題を見つけ出す力
- ② 問題の解決に向けて、自らの意志に基づいて行動する力
- ③ 自分の意見に偏らず、仲間と議論する力
- ④ 広い視野でよりよい方法を模索する力

が必要になる。これらのことと、根底である「よりよい社会を自分たちの手で実現したい」という夢をもつことで、子どもは「持続可能な開発」を現実のものとしていくと考える。

そのためには、知識偏重の教育ではなく、生活教育を基盤とした問題解決的学習過程による授業により、子どもの問題解決力を高めることが重要である。

本校では、すべての教科において、知識をつける時間と、生活教育を基盤とした問題解決的学習過程をバランスよくカリキュラムに組み込み、日々の教育活動をおこなっている。

2 授業実践（一部教科のみ抜粋。詳細は本校に直接お問い合わせください。）

<国語科> 鬼を捕まえろ

現代絵本に登場する鬼と、「今昔物語集」に登場する鬼とを読み比べた。現代絵本の鬼は、教育的配慮から、孤独だが心の優しい生き物として描かれている。対して、「今昔物語集」の鬼は、自分を養ってくれている子どもを食べてしまおうとする残酷な鬼である。この違いから、昔の人が鬼をどのように捉えていたのかを追究した。その結果、昔の鬼は災いをもたらす恐ろしいものとして捉えられていたことがわかった。また、鬼の名をかたって政敵を暗殺してしまうということもあった。この鬼のとらえ方が、どのように現代のとらえ方へと変化していったのかを子どもは追究していった。

<社会科> 輸出される日本のあたりまえ

現在、鉄道技術やリサイクル技術、水道技術など日本式生活インフラが世界的に注目を集め、輸出され始めている。日本の生活にとってあたりまえのことが諸外国相手のビジネスになっていることに驚く者は多い。その中でも特に、日本の水道技術は世界最高水準にあり、水ビジネスが注目されている。しかし、水事業に関しては官公庁と民間企業の役割が長年分断されてきたために官民一体化が大幅に遅れた状況がある。そこで、今の日本では世界の水メジャーと対等に戦えない状況があることを踏まえ、水ビジネスを取り巻く問題の真相を考えて、水ビジネスを通して見える将来の日本のビジネスのあり方や現代社会の仕組みを捉える授業を行った。そして、自分たちが担うことになる日本や世界の姿を思い描き、自分にできることや自分と社会とのつながりを考え続けるようになった。

<理科>窒素循環による水の浄化システム（科学研究費奨励研究）

メダカが生き続けられる環境を整えたいと願った子どもは、メダカ自身が放出しているアンモニアの存在を無くす必要性に気づいた。しかし、ろ過などでは取り除くことができないことから、生物の力、すなわち分解者の存在に注目し、追究を進めた。微生物による水の浄化システムについて追究を進める中で、「微生物燃料電池」という、発電システムの存在を知った。子どもは、どうしてもその存在を見たいと願い、岐阜大学の市橋先生にアポイントメントを取り、夢のシステムを目の当たりにした。子どもは、微生物を利用した持続可能なシステムについて考え始めた。

<技術科>循環する野菜、循環しない野菜

遺伝子組み換えが行われたトマトの実から採取した種と、遺伝子組み換えが行われていないトマトの実から採取した種を同時に植え、それらを栽培していく中で、実がつく種と実がつかない種があることに気付いた。子どもは、その理由について追究を進めた。遺伝子組み換えにより、次世代の実を結実させない技術があることに気づいた子どもは、新しい種を利用し続けるための技術に迫るため、種を採取し、作物を作り続ける技術の意義や価値について考えを深めた。

<家庭科>子どもは社会の宝物

家族の姿について追究する中で、社会の一番小さな単位である家庭は、社会と切り離されて存在せず、むしろ社会の状況に翻弄されがちであることに気づいた。そして、一番の被害者が子どもではないかと考え始めた。そして、子どもを取りまく問題を、貧困や、虐待など社会的背景から考え、家族だけの問題として捕らえていくのではなく、地域や社会で子どもを育てていくことが大切であると気づいた。子どもは、実例をあげながら法律、施設、環境などのさまざまな方向から多面的に考え始めた。

<英語科>Salmon for Sushi from the World

子どもは、普段何気なく口にしている生食のサーモンをあらためて見つめ直し、インターネットで目にした、着色料や寄生虫による安全性、えさの食べ残しによる環境汚染、そして養殖による生態系への影響の問題に着目した。実際にチリやノルウェーといった養殖業者に英語で連絡を取り、すべての問題を解決するよう配慮された養殖が行われていることを知った。子どもは、安全や環境を最優先にされた養殖がグローバルの視野に立って行われていることを知り、世界が食で結ばれていることを大事にしていきたいと感じた。

○ESD あいち・なごや子ども会議への参加（平成26年度2年生生徒）

現地学習（気候変動・エネルギーコース）参加

気象変動について調べていくうち、農業や工業に加え、普段の生活にも密接に関係している。それらの産業が抱える問題の解決に向けて、さまざまな取り組みがなされている。一方で、私たちの普段の生活にも改善すべき点が多くある。自分たちの小さな力で改善しなければならないと強く思った。

